

宮城県栗原市栗駒猿飛来

# 鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点 第1次発掘調査報告

辻 秀人・佐々木拓哉・横田 竜巳・森 千可子  
相川ひとみ・阿部 悠大・泉澤 まい・笠原 大暉  
鈴木 里奈・野呂 夕奈・星 あゆみ・村木 翔

## 調 査 体 制

- 調査期間** 平成 27 年 3 月 12 日～23 日、3 月 27 日～31 日
- 調査主体** 東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール
- 調査担当** 東北学院大学文学部 教授 辻 秀人
- 調 査 員** 佐々木拓哉・横田竜巳（大学院博士課程前期 2 年）  
木村圭佑・森千可子・岸 知弘・芦野 悟・阿部大樹・佐々木雪乃  
渋谷若菜・東海林裕也・菅原里奈・新保摩実・西川悠也・廣瀬拓磨  
結城彩花（4 年生）  
相川ひとみ・阿部悠大・泉澤まい・笠原大暉・鈴木里奈・野呂夕奈  
星 あゆみ・村木 翔（3 年生）  
梅宮崇成・鈴木舞香・白銀沙也佳・木村 智・野村真吾・小丸雄大  
石山朋美・吉原夏海（2 年生）  
佐藤由浩・山口貴久（外部参加者）
- 調査協力** 栗原市教育委員会 猿飛来コミュニティセンター 青雲神社  
鳥矢ヶ崎史跡公園保存会 青雲神社宮司佐藤伸成 総代長菅原 勁  
千葉長彦、大場亜弥、安達訓仁、工藤 健、佐藤 茂（敬称略）



写真 1 鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点調査前 右手前 1 号墳、左奥 2 号墳

## 例 言

- 1、本書は平成27年3月12日～3月23日、3月27日～31日に実施した宮城県栗原市栗駒猿飛来に所在する鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点の第1次発掘調査成果をまとめたものである。
- 2、発掘調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施した。
- 3、調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は考古学ゼミナール所属学生、所属予定の学生である。
- 4、出土遺物、作成図面の整理は東北学院大学文学部歴史学科考古学ゼミナール所属の3年生が中心となって実施した。
- 5、本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は参加者が分担した。各項目の執筆者は文末に記した。報告の記載は各執筆者の原稿に辻が加筆訂正を行ったものである。従って最終的な文責は辻にある。
- 6、本書に掲載した図面の高さ表示はすべて海拔高、北はすべて真北を示す。
- 7、本書に掲載した平面図の位置は、便宜的に局地座標系により表示した。局地座標のX,Y座標は調査にあたって設置した基準点T1（国家座標 X=-131889.046 Y=14885.611）を X=100.00、Y=100.00 とした。X軸は真南北方向、Y軸は真東西方向である。
- 8、鳥矢ヶ崎古墳群に関わるこれまでに刊行された報告書は以下の通りである。

### 鳥矢ヶ崎古墳群関連報告書

栗駒町教育委員会 1972年 『宮城県栗原郡栗駒町鳥矢ヶ崎古墳調査概要』

昭和四十六年度栗駒町埋蔵文化財報告

辻 秀人他 2015年 「宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告」

『東北学院大学論集 歴史と文化』第53号

## 第1章 調査に至る経過

鳥矢ヶ崎古墳群の存在は明治時代から知られており、昭和46年には、東北学院大学加藤孝教授、東北大学高橋富雄教授を中心とする栗駒町鳥矢ヶ崎古墳群調査団によって発掘調査が実施された。調査の結果、1号墳からは東北北部に分布する末期古墳群に共通する石室かと思われる埋葬部が、2号墳からは地表下に埋納された木棺痕跡が発見され、鳥矢ヶ崎古墳群には北の要素と中央の要素が混在していると考えられた。また、鍔帯金具一式等が出土し、被葬者は当時の律令国家の役人であったことが判明し、当地が伊治城で反乱をおこした伊治公砦麻呂の一族が基盤とした地域と見られることもあわせて、東北古代史を考える上で重要な知見をもたらすこととなった（栗駒町教委 1972）。

また、東北学院大学辻ゼミナールは2012年以降3年間にわたって測量調査を実施し、39基にのぼる古墳群全体の測量図を作成、古墳群全体の姿を明らかにした（辻他 2015）。この結果、鳥矢ヶ崎古墳群は全体の姿が良好に保存されているきわめて貴重な古墳群であることが明瞭となった。また、安達訓仁氏による出土遺物の再検討により、（安達 2015）A1・A2号墳が8世紀後半代に位置づけられることが明らかにされた。鳥矢ヶ崎古墳群は伊治城が造営され、宝亀十一年の伊治公砦麻呂の乱が引き起こされた頃に営まれた古墳群と理解される。伊治公一族が基盤とした伊治城に近いこの地域にはこの時期の有力な古墳群は他になく、鳥矢ヶ崎古墳群こそが伊治公一族の墓所であったと考えられる。鳥矢ヶ崎古墳群はきわめて重要な歴史的な意味を持つといえよう。

ところで、鳥矢ヶ崎古墳群1号墳には北の要素が、2号墳には中央の要素があると指摘されている（栗駒町教委 1972）が、残念ながら1号墳の石室や、2号墳の木棺の構造が明瞭ではない。鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査以後東北北部にも墳丘下に木棺が埋納された事例が多数確認されており、木棺の存在だけではその性格を論ずることができない状況にある。従って鳥矢ヶ崎古墳群で用いられている木棺がどのようなものかを知ることがその性格を考えるために必要であることが痛感された。

周知のように鳥矢ヶ崎古墳群は県指定史跡であり、更なる発掘調査を実施することはできない。東北学院大学辻ゼミナールでは測量調査終了後、埋葬部の解明が重要な課題と考え、発掘調査が可能な墳丘を探索したところ、鳥矢ヶ崎古墳群の北、青雲神社東側の丘陵上で2基の墳丘を確認した。地元ではこの2基の墳丘を平成16年に古墳群と認識しており、1号墳、2号墳と名付けられていた。鳥矢ヶ崎古墳群の埋葬部の構造を把握するため、2基の古墳を調査することを決断し、土地を所有する青雲神社宮司佐藤伸成氏、総代菅原勁氏に調査の許可をお願いし、ご快諾を得、調査を実施するに至った。

## 引用文献

栗駒町教育委員会 1972年 『宮城県栗原郡栗駒町鳥矢ヶ崎古墳調査概要』 昭和四十六年度栗駒町埋蔵文化財報告

安達訓仁 2015年 「第4章 鳥矢ヶ崎古墳 A1・A2号墳出土遺物について」 『宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告』 『東北学院大学論集 歴史と文化』 第53号

辻 秀人 他 2015年 「宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告」 『東北学院大学論集 歴史と文化』 第53号



写真2 青雲神社地点1号墳現況

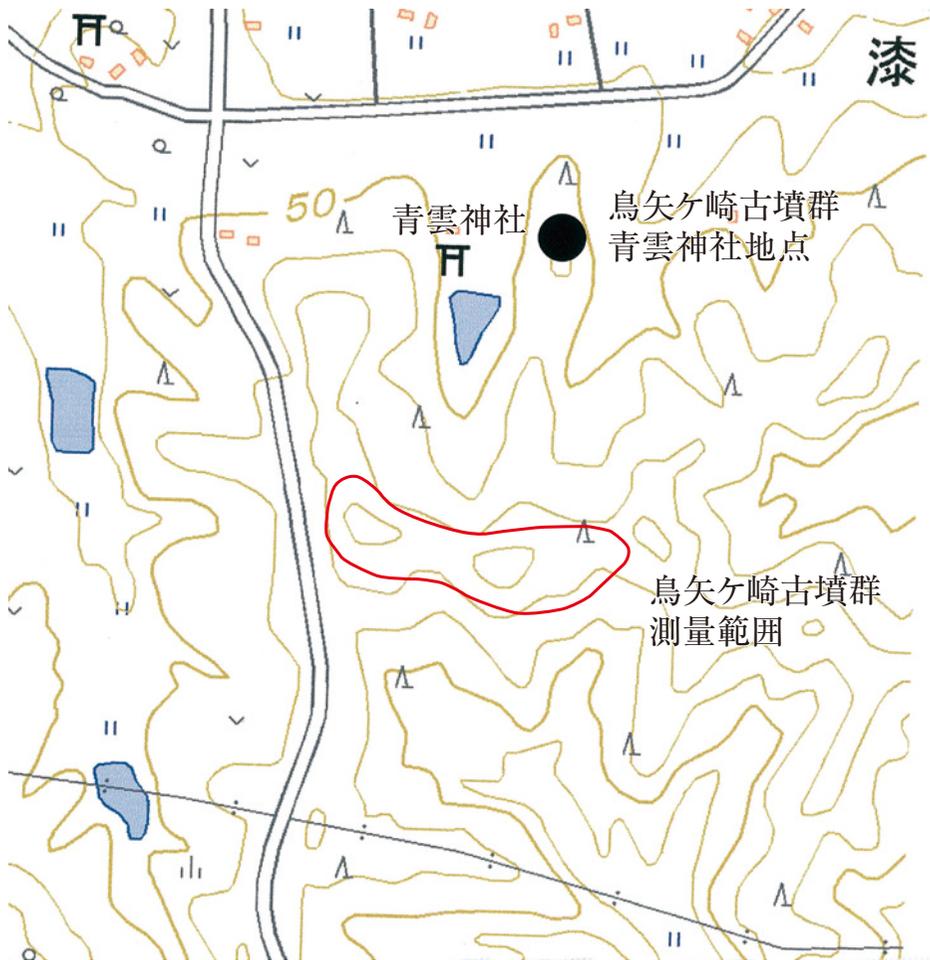


写真3 青雲神社地点2号墳現況

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 古墳の立地

鳥矢ヶ崎古墳群は、宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎に所在する。奥羽山脈から派生する南東に延びる丘陵の痩せ尾根上から南斜面にかけて総数39基が分布する。県指定史跡である。鳥矢ヶ崎古墳群の西端、栗駒山を望むことができる地点から丘陵は枝分かれし、尾根が北にも延びる。北に延びる尾根上、史跡指定範囲外に3つの高まりが連なる地点がある。この墳丘状の高まりの性格は明らかではない。また、同じく鳥矢ヶ崎古墳群B地点の途中で丘陵は枝分かれし、北に尾根が延びて青雲神社の東側に至る（第1図）。この青雲神社東側に延びる尾根の先端近くに2基の墳丘が確認された。この地点を鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点と呼び、2基の測量を実施するとともに1号墳の発掘調査を実施した。所在地は栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎2-1である。



第1図 鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点の位置

## 第2節 歴史的環境

鳥矢ヶ崎古墳群が所在する現在の栗原市域は、古墳時代から古代にかけて東北北部と東北南部の文化の境界にあたり、歴史的に様々な事象が起きたことが知られている。

古墳時代には東北南部の土師器を使い、古墳を築く文化（古墳時代社会）と狩猟、採集を生業とする北海道の文化と共通する続縄文文化とが境を接していた。

宮城県栗原市築館城生野に所在する国指定史跡伊治城跡では、2条のL字形に伸びる溝が検出され、堆積土中から大量の塩釜式土師器と北大I式の深鉢が出土し、古墳時代前期に位置づけられた（築館町教育委員会 1992）。2条の溝を組み合わせて豪族居館との理解もあるが、必ずしも明瞭ではない。ただ、古墳時代前期にこの地に古墳文化を持つ人々が暮らし、続縄文文化の文物を入手できる状況にあったと見ることができる。

また、平成26年には伊治城跡の南西約500mの位置にある入の沢遺跡の大規模な発掘調査が実施され、大規模な堀と材木堀で囲まれた古墳時代前期の拠点的な集落が存在することが明らかにされた（村上 2015、宮城県教委 2014）。入の沢遺跡の西側の尾根上にある大仏古墳群は入の沢遺跡との関係が考えられている。伊治城跡の北西約3kmにある長者原遺跡の存在とあわせ、この地域には古墳時代前期において古墳文化を持つ集落の広がりが見られ、北の続縄文文化と相対していた様相を確認することができる。入の沢遺跡の大規模な防御施設の存在を考えると、古墳時代前期において古墳時代社会と続縄文社会との軋轢がこの地にあった可能性があるのだろう。

古墳時代中期～後期はこの地の遺跡は明瞭ではない。奈良時代にいたり、再び大規模な遺跡が確認されるようになる。

伊治城は、東西700m、南北900mの範囲を土塁と大溝で区画し、内部に政庁を設ける大規模な施設で、767（神護景雲元）年に律令国家の東北北部への進出の足がかりとして築かれた。伊治城建設に先だって関東の人々の移民が行われたことが伊治城の南約2kmの御駒堂遺跡で確認されている（宮城県教委 2014）。また、墳墓では姉齒横穴群、大沢横穴群が営まれた。横穴として簡略化され新しい段階のものである。在地の墓制ではなく、移民と関係する可能性が高い。両横穴群は内陸では最北の横穴群である。

鳥矢ヶ崎古墳群が営まれた奈良時代には、南東約6kmにある伊治城周辺で関東からの移民、新たな墓制の開始など伊治城造営に関わる大きな変化が進行していた。鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ人々は歴史的な大変動に直面した。鳥矢ヶ崎古墳群には、東北北部の円墳で構成される古墳群と共通する様相を見て取ることができる。小規模な石室の存在も含めて、いわゆる末期古墳群の範疇で理解することができる。

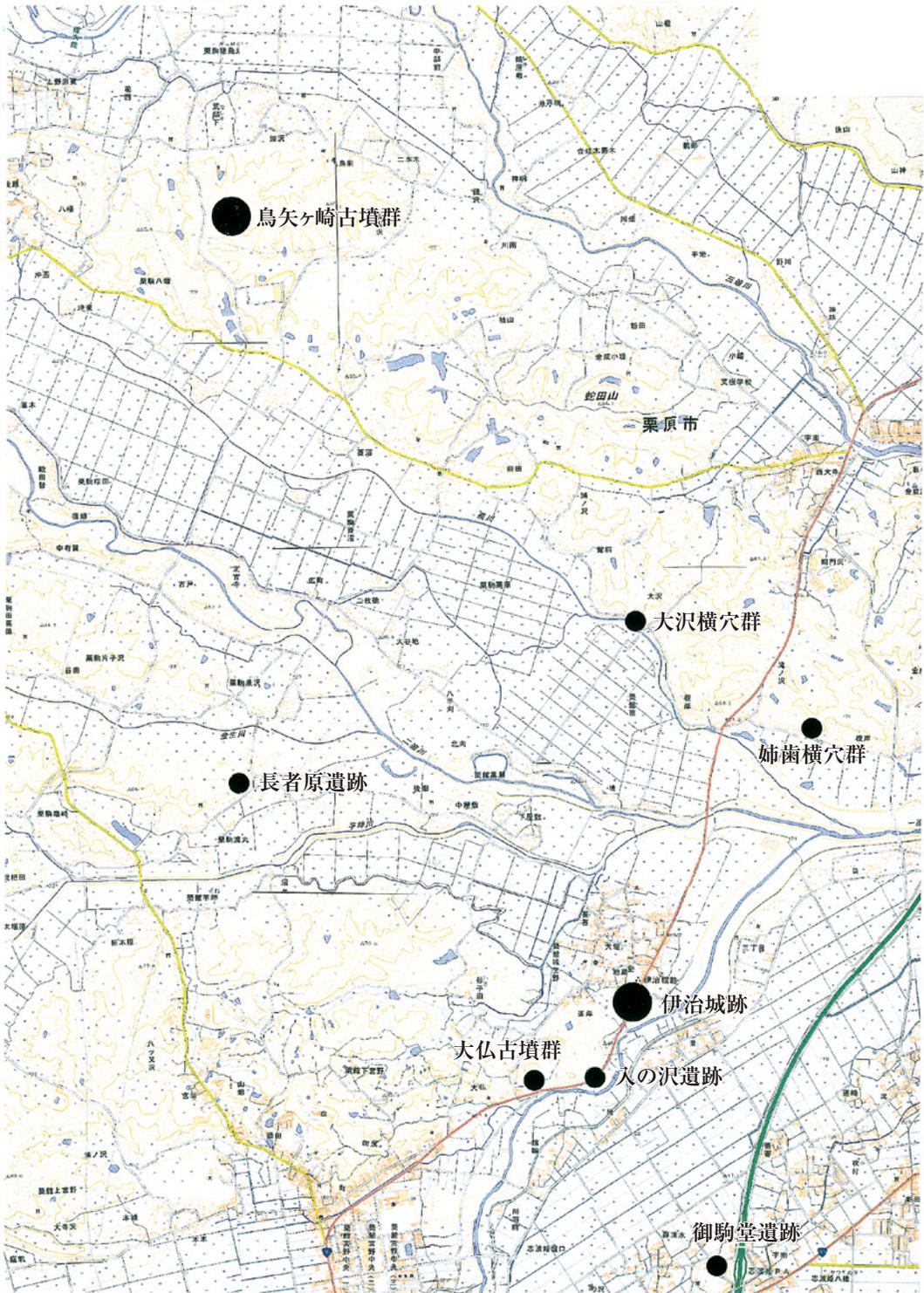
つまり、鳥矢ヶ崎古墳群を営んだ人々は、大きくみれば東北北部の蝦夷と呼ばれた人々と共通する文化の中であり、この地域の在地の勢力が営んだものと見られる。しかし出土遺物には北の末期古墳群と共通する要素とともに律令国家と関係の深い文物もあり、国家と在地勢力との緊張関係の中でこの地の人々がとった対応を示している。

## 引用文献（年代順）

- 築館町教育委員会 1992年 『伊治城遺跡—平成3年発掘調査報告書—』 築館町文化財調査報告書第5集
- 宮城県教育委員会 2014年 「入の沢遺跡」『平成26年度遺跡調査成果発表会発表要旨』 宮城県考古学会
- 宮城県教育委員会 2014年 「御駒堂遺跡」『平成26年度遺跡調査成果発表会発表要旨』 宮城県考古学会
- 村上裕次 2015年 「入の沢遺跡の調査成果」『東北学院大学アジア流域文化研究所公開シンポジウム古代倭  
国北縁の軋轢と交流栗原市入の沢遺跡で何が起きたか資料集』



写真4 青雲神社地点第1号墳発掘調査風景



第2図 鳥矢ヶ崎古墳群および周辺遺跡位置図（古墳時代～古代）

### 第3章 測量・発掘調査成果

#### 第1節 測量

##### 1. 測量の方法

鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点の測量調査を行うにあたって、次のような方法で原図を作成することとした。

- ・原図縮尺 墳丘分布範囲 1/20
- ・等高線 墳丘分布範囲 25 cm ごとに記入し、1 m ごとに太線とする。
- ・作図方法 T1、T2 を基準点とし、トータルステーションを用いて XY 座標を測定し、測量基準点を作成した。なお、必要に応じて併合トラバースを作成し、測量基準点の正確性を確認している。各測量基準点から平板を用いて作図した。作図に当たっては墳端線、傾斜変換線を先に記入し、後に等高線を作成した。等高線は標高により作成した。

測量原点は、2012年に栗原技研に依頼して、GPS測量により設置した基準点を用いる。その成果は以下のとおりである。

T1 X=-131889.046 m Y=14885.611 m  
標高 67.765 m

T2 X=-131860.115 m Y=14925.241  
標高 66.968 m

注 この成果は2012年2月27日に観測したものである。東日本大震災前、平成20年6月14日発生岩手宮城内陸地震後のデータと比較するとX軸で、1.29 m 南に、Y軸で2.875 m 東に移動しており、東日本大震災と岩手宮城内陸地震のいずれよりも前のデータと比較すると、X軸で1.18 m 南に、Y軸で2.729 m 東に移動している。

T1、T2の座標データは公共座標で表示されている、実際の作図作業にあたっては、公共座標は数値が大きすぎ、扱いにくいので、T1をX=100.00、Y=100.00とし、真南北方向をX軸真東西方向をY軸とする局地座標系を用いた。本報告掲載図面の表示も局地座標系を用いた。局地座標XYそれぞれの数値から100.00を減じた後T1のそれぞれの数値に加えることで、公共座標に転換可能である。

##### 2. 測量成果（第3図）

測量の結果、1、2号墳の位置関係と、それぞれの墳丘形態、規模が判明した。

1号墳は南北に延びる尾根線上の平坦面に築かれている。やや不整な円墳で、直径5.9～6.5 m、墳頂平坦面直径2.2～2.4 m、墳丘高さ約1.2 mを測る。墳丘の周囲はややくぼん

しており、墳丘の外側に直径約8mの傾斜変換線がめぐり、墳丘周囲に周溝等の存在を予想させる。墳丘規模は鳥矢ヶ崎古墳群の円墳中で第2群（辻他 2015）に属する。

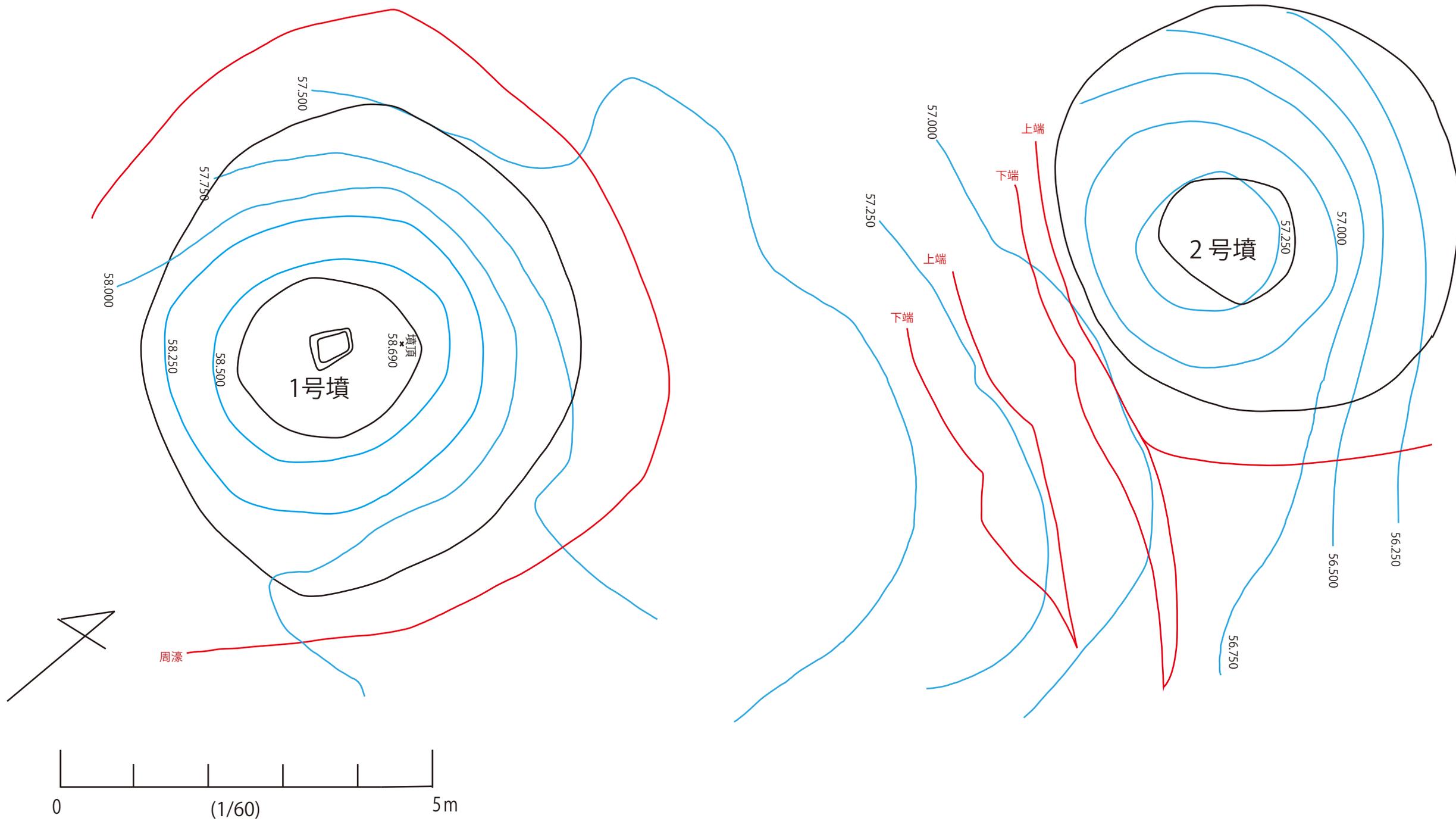
2号墳は北に延びる尾根線が平坦面から北側斜面に移り変わる位置に築かれている。やや不整な円墳で、直径5.4~5.8m、墳頂平坦面直径1.8m、墳丘高さ最大1.2mを測る。墳丘周囲には溝状のくぼみがめぐり、周溝の存在が予想される。墳丘規模は鳥矢ヶ崎古墳群の中で第2群に属する。

## 引用文献

- 辻 秀人 他 2015年 「宮城県栗原市栗駒猿飛来鳥矢ヶ崎古墳群測量調査報告」『東北学院大学論集 歴史と文化』第53号



写真4 測量調査風景



第3图 1·2号墳測量图

## 第2節 1号墳の発掘調査

### 1. 墳丘上面

今回の発掘調査では、まず1号墳において、周濠の有無の確認や、古墳墳丘・周濠外の様子を観察するため、トレンチ設定を行い表土（腐植土）を除去した。トレンチは、墳丘を30cm幅の畦を十字に残して四分割し、北側から逆時計周りにa、b、c、d区とした。

表土を除去したところ、墳丘上で粘土質の黄色い土が検出され、古墳墳丘の上面であると考えられた。墳丘下部から周溝部分、その外周では黄褐色の均質な土層が広がり、地山面であると判断された。1号墳の墳丘は下半が地山整形、上半は周溝部分と外周を削った土を盛り上げて作り出されていることが判明した。周溝部分は深さ10cm程度で明瞭ではないが墳丘の周囲をめぐっていた。

墳頂部分では、表土に混じって長軸10cm程度の河原石が多く分布、中心部分にはウレタン製の箱が中に河原石を詰め込んだ状態で埋め込まれていた。この箱を除去したところ、その下に黒色の土があり、掘り下げた結果、ピット状の落ち込みが確認された。落ち込みの周囲を河原石が円形に囲んでいた。この落ち込みと周囲の河原石は、後世に壊されているが、本来は石組みの遺構であったのだろうと判断された。墳頂に分布する河原石は表土中にもあり、本来の位置は保っていないと考えられた。中心部の石組み遺構が壊された際に周囲に捨てられた可能性がある。この河原石が分布する範囲を中心に陶器の破片が多数出土した。破片はすべて同一個体であった。

石組遺構、河原石の散乱、出土遺物ら見て1号墳上面は中世に経塚として利用されたと考えられた。

(野呂 夕奈)

### 出土遺物

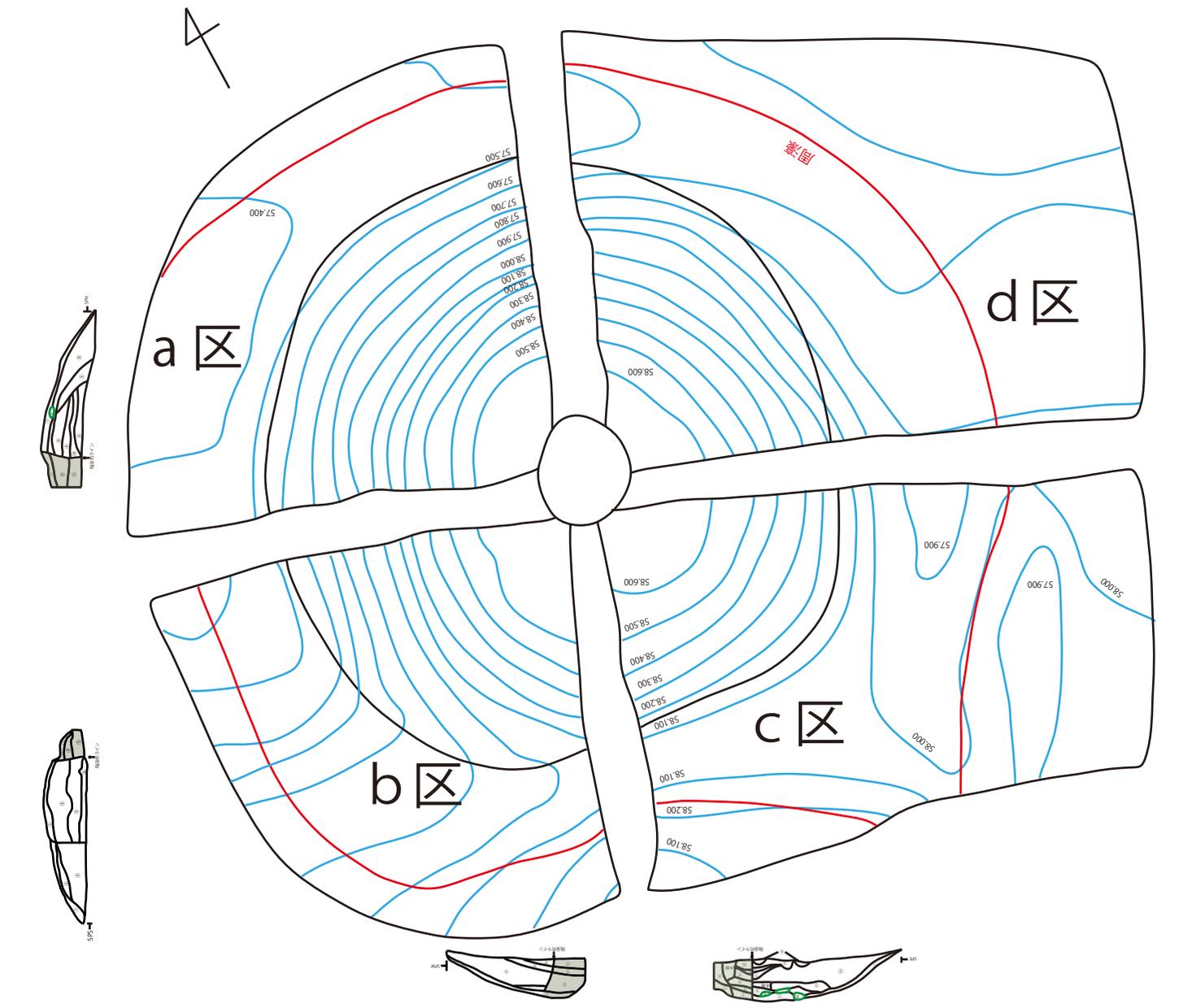
#### 陶器

礫に混じって出土した陶器破片を接合したところ、壺の体部1/3程度であることが判明した（第5図）。口縁部は意識的に打ち欠かれている。

全体にロクロ成型で、口縁部から胴部半ばにかけて、灰釉がかけられ、緑色を呈している。焼成は良好で、釉薬のかかっていない部分は黒褐色を呈する。体部全体に縦方向の調整の痕跡がみられる。八重樫忠郎氏から渥美焼であるとのことご教示を得た。出土状況や口縁部が打ち欠かれているなどの特徴から、経筒の外容器である可能性が高い。年代は、口縁部の特徴から渥美焼の編年（愛知県 2012）の2a期、12世紀末と推測される。

渥美焼は、宮城県、福島県、岩手県で出土事例があり、岩手県の平泉遺跡群で最も多く発見されている。本例は、1号墳墳丘上に営まれた経塚と奥州藤原氏との関係がどのようなものであるか考えていく手がかりになる可能性がある。

(森 千可子)



1号墳c区西壁

原色	粘性	しまり	粒度	備考
① Hue 7.5YR 黒褐3/2	強い	弱い	なし	表土
② Hue 7.5YR 明褐5/8	やや強い	弱い	なし	墳丘形成土
③ Hue 7.5YR 褐4/4	やや強い	弱い	粘土	墳丘形成土
④ Hue 7.5YR 褐4/6	強い	強い	粘土	墳丘形成土
⑤ Hue 10YR 黄褐5/8	やや強い	やや強い	粘土	墳丘形成土
⑥ Hue 10YR 褐4/6	やや強い	やや弱い	粘土	墳丘形成土

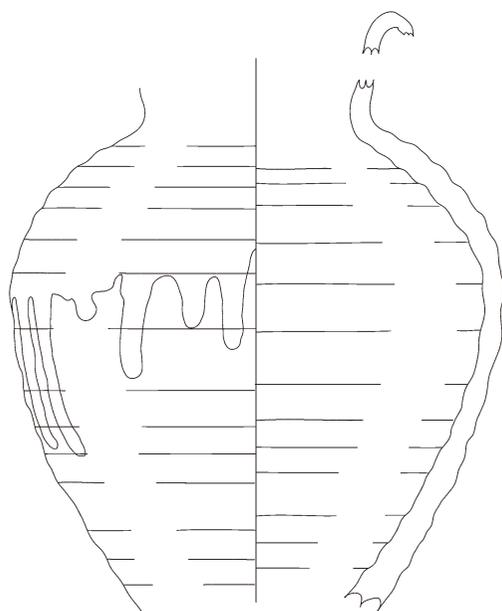
1号墳a区南壁

原色	粘性	しまり	粒度	備考
① Hue 10YR 黒褐2/3	弱い	中	シルト	表土
② Hue 10YR 褐4/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土
③ Hue 7.5YR 明褐5/8	弱い	中	シルト	墳丘形成土
④ Hue 10YR 黄褐5/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土
⑤ Hue 10YR 黄褐4/4	弱い	中	シルト	2.5YR 4/1黄灰極小粒、2%混入
⑥ Hue 2.5YR オリーブ褐4/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土
⑦ Hue 7.5YR 明褐5/6	弱い	中	シルト	墳丘形成土
⑧ Hue 10YR 黒い黄褐 5/4	弱い	中	シルト	墳丘形成土

d区西・南壁断面図

原色	粘性	しまり	粒度	備考
① Hue 10YR 黒褐3/2	弱	中	シルト	表土
② Hue 10YR 黄褐6/5	弱	中	やや粘質なシルト	墳丘形成土
③ Hue 10YR 暗褐3/3	弱	中	シルト	墳丘形成土
④ Hue 10YR 黒2/1	やや強	中	やや粘質なシルト	表土
⑤ Hue 10YR 褐4/6	やや強	中	粘土	墳丘形成土
⑥ Hue 7.5YR 明褐5/6	強	中	粘土	墳丘形成土
⑦ Hue 10YR 黄褐5/8	やや強	中	やや粘質なシルト	墳丘形成土
⑧ Hue 7.5YR 明褐5/8	やや強	中	やや粘質なシルト	墳丘形成土
⑨ Hue 10YR 黄褐5/6	弱	中	やや粘質なシルト	墳丘形成土
⑩ Hue 10YR 明黄褐6/8	やや弱	中	シルト	墳丘形成土

第4図 1号墳全体図



第5図 渥美焼実測図 (1/3)



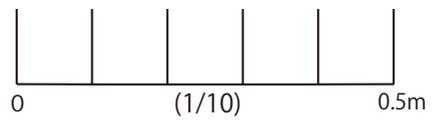
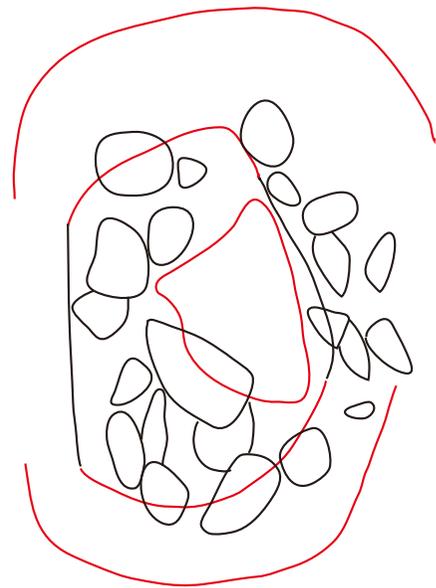
写真5 渥美焼写真



写真6 1号墳 墳丘面



写真7 1号墳墳頂 石組遺構



第6図 石組遺構実測図

## 2. 墳丘の掘り下げ

川原石分布状況、石組遺構、墳丘面の平面図作成後、墳丘を掘り下げ、埋葬部を探索した。墳頂部から約40cmほど掘り下げた段階で精査したところ、墳丘中央部のa～d区にわたって黄褐色の土が分布している様子が観察された。精査の結果、石組み遺構に壊されている部分があるものの、黄色土の分布が長方形を呈することが判明し、木棺の埋納に伴う陥没坑であると考えられた(写真8)。

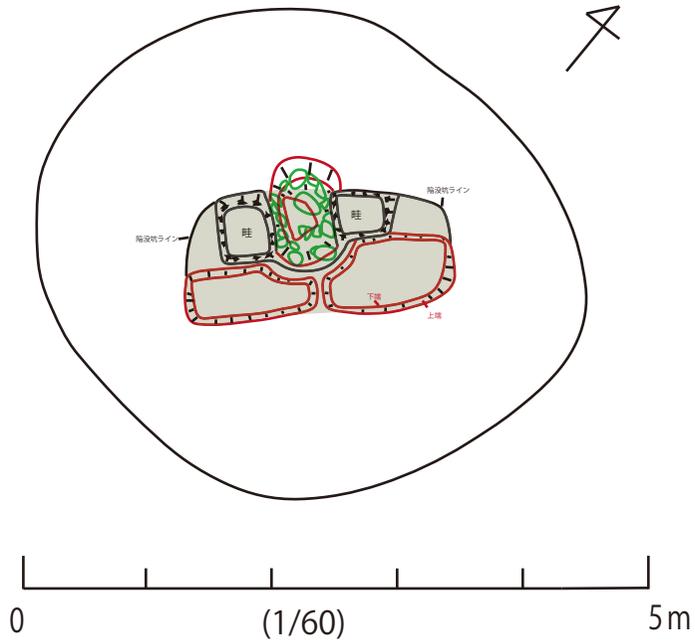


写真8 確認された陥没坑(北から)

陥没坑の全体の姿を確認するため、土層観察のために設けていた畦を石組み部分を残して除去した。掘り下げ後の精査の結果次のことが明らかになった。まず、墳丘の中心部分には、陥没坑があるとみられていたが、D区あたりで確認されていた白っぽい土と、旧表土とみられていた黒い土の様子から、白っぽい土が陥没坑の土、黒い土は積み土であることが確認された。墳丘土層断面では墳丘の土に明らかなズレが生じており、墳丘上面にまで陥没坑が達している様子が観察された。陥没坑は南北2.2m東西0.95mをはかり、埋葬施設の陥没坑と見ることが可能であることが判明した。

陥没坑東半分を掘り下げ、埋葬部を探索したが、埋葬部には至らなかった。埋葬部の調査は来年度の課題である。

(星 あゆみ・鈴木 里奈)



第7図 最終発掘面



写真9 陥没坑の掘り下げ

## ま と め

鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点の調査では、青雲神社東側丘陵頂上の分布する2基の墳丘の測量調査を行い、そのうちの1基、1号墳の発掘調査を実施した。

測量調査では、墳丘のいずれもが周溝がめぐる小型の円形で、鳥矢ヶ崎古墳群中の小型墳と同様の規模、形態であることが確認された。

1号墳の調査では、新旧2時期の遺構が発見された。

新しい遺構は、墳丘中央部表土直下で検出した円形の石組遺構である。直径50cm程度の円形の石組の内部に黒色度が落ち込んでおり、黒色土を掘り下げたところ、石組みは下部まで続いており、円形の空間が確認された。石組みの周囲には川原石が散乱しており、川原石に混じって陶器破片が多く出土した。陶器は復元したところ壺形で、口縁部が意識的に打ち欠かれており、経筒の外容器に共通するものであった。

このような状況からみて、石組遺構は経文の埋納遺構であり、盗掘により出土陶器は遺構内部に治められていた経筒外容器が掘り出されて周辺に捨てられたものと判断された。1号墳は経塚として利用された時期があったことになる。

出土陶器は渥美焼であるのご教示を八重樫忠郎氏から受けた。残された口縁部の破片は端部が反り返っていて、渥美焼の編年（愛知県 2012）に照らせば12世紀後半代に位置づけられよう。東北地方の経塚の中で平泉と関係する地域の経塚で渥美焼の外容器が用いられることはこれまでに良く知られている（八重樫 2002）。

これらのことから1号墳上に営まれた経塚は12世紀後葉、藤原秀衡の時代に平泉と深い関係のもとに営まれたと考えられる。ところで、岩手県平泉町志羅山遺跡第80次調査で道路側溝から出土した木簡に「トヤカサキ」との記述があることが知られている（酒井 2001）。木簡は全体がカタカナで書かれており、報文では「鳥谷ヶ崎の如法経の石をば、結縁に持たせ給うべし、五日の日より十八日に写に（増）し給うなり」と解釈されている。

この内容の理解には検討の余地があるようだが、「鳥谷ヶ崎」が地名であり、「鳥谷ヶ崎」の地に石をもって経塚を造営したということは理解できる。「鳥谷ヶ崎」を鳥矢ヶ崎とすれば、今回の調査地が栗原市鳥矢ヶ崎にあり、川原石をもって経塚を営んでいるという事実とこの木簡の内容に矛盾はない。経筒の外容器が渥美焼で、平泉との関係が伺われる点もまた整合的である。報文その他では「鳥谷ヶ崎」が平泉町内の地名とされているが、このような状況から見て、栗原市鳥矢ヶ崎もまた候補地の一つと見ることも可能だろう。

経塚の位置する北に延びる尾根には2号墳が存在し、これも墳頂に石が散乱しているため、1号墳と同じように末期古墳の墳丘を利用して営まれた経塚で有る可能性が高い。また、この尾根の青雲神社をはさんで西側にも同じように丘陵が北に延び、その上にも塚状の盛り上がりが3基確認されている。さらにこの北に延びる二つの尾根に挟まれて湧水を水源とする沼が存在する。尾根上に分布する経塚を含む塚群、青雲神社、尾根に囲まれた

沼の存在を総合して遺跡全体をどのように考えるかは今後の課題と考える。

墳丘内の調査では、陥没坑が発見された。陥没坑は墳頂部から始まっており、陥没坑の存在が墳頂が平坦になっている理由だと考えられた。陥没坑の存在により、1号墳は本来は末期古墳の一つとして築かれ、後に経塚に転用されたことが判明した。掘り下げを停止した面は墳丘積み土の中にあり、陥没坑は埋葬部には至っていないと見られる。ただし、陥没坑の形態が想定される埋葬部に近いため、調査は棺に近い深さに達している可能性が高い。次回調査では埋葬部を調査し、棺の構造、副葬品等の様相を明らかにしたい。

(辻 秀人)

### 引用文献（年代順）

- 酒井宗孝 2001年 「志羅山遺跡第80次調査」『志羅山遺跡発掘調査報告書（第47・56・67・73・80次調査）』  
岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第352集
- 八重樫忠郎 2002年 「東北の経塚—分布傾向からの予察—」『平泉文化研究年報』第2号
- 愛知県 2012年 「渥美焼の編年」『愛知県史別編纂業3 中世・近世 常滑系』

### 謝 辞

鳥矢ヶ崎古墳群青雲神社地点の発掘調査にあたり、土地を所有する青雲神社宮司佐藤伸成氏 総代長菅原 勁氏には調査の実施をご許可いただきました。調査の遂行にあたり、栗原市教育委員会及び教育委員会千葉長彦、大場亜弥、安達訓仁の諸氏、佐藤茂会長をはじめ鳥矢ヶ崎史跡公園保存会の皆様にも全面的にご支援をいただきました。また、工藤 健運営委員会委員長をはじめ地域の皆様にも宿舎として猿飛来コミュニティセンターをご提供いただきました。皆様のご支援なくして調査は実行できませんでした。心より御礼を申し上げます。